揺れ動く〈ヴァシレーション〉

燃えあがる緑の木　第二部

大江健三

揺れ動く〈ヴァシレーション〉

燃えあがる緑の木 第二部

大江健三郎

新潮社

揺れ動く（ヴァシレーション）

――燃えあがる緑の木　第二部――

一九九四年　八　月三〇日　発行
一九九四年一〇月三〇日　二刷

著　者　大江健三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話　営業部〇三―三二六六―五一一一
編集部〇三―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kenzaburô Ôe 1994, Printed in Japan
ISBN4-10-303614-1 C0093

目次

第一章　イェーツに導かれて　5
第二章　「中心の空洞」　53
第三章　正直いって神はあるんですか？　95
第四章　気象のフィードバック　139
第五章　「死に到る手続きの数学的記述」　179
第六章　薔薇の奇蹟　223
第七章　アレクサンダー大王のてんかん　265

裴幀·司 修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

揺れ動く（ヴァシレーション）

——燃えあがる緑の木　第二部——

第一章　イェーツに導かれて

私たちの教会に、火急持ち出し用の大型トランクがある。一時はあからさまに焼き打ちのことをいってくる脅迫が続き、農場の生活棟にボヤも出たのだから、私たちの側でいうかぎり実際的なプログラムのひとつ。そこには、ギー兄さんと関りのあった人たちの、様ざまなノートや手紙がおさめられている。ザッカリー・K・高安は、あらためて「屋敷」を訪れた最初の時、私たちの教会にも、創立以来の関係文書を保存するarchivesが必要だと主張した。かれ自身が、率先して、新聞・週刊誌の記事、あるいはそのコピイに写真の類や、ヴィデオ・テープにおさめたテレヴィ・ドキュメントを整理した。

ところが一応客観的な記録とは別に、教会とそれぞれのレヴェルで繋がる人たちの手紙やノート、パンフレットがあり、それらがたまってきてもいた。こうした文書をひとまとめにしていれるトランクは、もと外交官として移動用機材を豊富に持っていられる総領事が寄付してくださった。その際、総領事は、トランクに付いているネーム・カード枠に「癒される者たちの記録」と書き込まれた。思いがけない手先の器用さを表わした、木版のような効果の活字体で。

癒されたでなくて、癒されるである点、初めのうちは坐りが悪く感じられたものだ。しかし自分で書かれたものもそこに納められた総領事自身のことをいえば、あの人に癒されたという意識は縁遠かったのではないか？　しかも総領事は、癒されることを終始望んでいられたのだから、これはやはり妥当な命名だったと思われるのである。

総領事のことを私はもと外交官と書いた。それは、まだ説明不足であったはず。総領事は教会が発足して半年たたぬうちに、外務省を退職して、「屋敷」へ引き揚げてこられたのだ。そして教会との関係を深められた。しかしギー兄さんと教会は、まず肉体的に総領事を癒すことができなかった。精神的には、さらには魂のこととしては、総領事は癒しをえられたのだったろうか？総領事の生涯の最後の一年間を思う時、そこには深い苦しみと苛だちの波風が立つものであったように感じられる。

しかし、そのように単純化していいものかどうか、経験の限られた私には、よくわからぬところが残ったのも確かなことだ。まだ十代でパリに留学されたピアニストの泉さんは、在仏大使館官補当時の総領事と友達だった。終りの頃の総領事が、若い頃のかれと結ぶのが難しいほど静かな人柄になっていたと、泉さんは個人誌のパンフレットに追悼していられるのである。

その総領事について、これから物語ってゆくことが私にできるように思うのは、森のなかに引き揚げて来られたこの人から、自分が教育を受けたと感じているからだ。後に総領事はテン窪の人造湖の北側斜面に建てられたプレハブの家に住まわれたけれど、初めはさきのギー兄さんの書庫脇の、かって私が寝室にしていた部屋を居室にされていた。その頃は書庫で本を読んだり、堅固に装備をかためて森の深みに入ったりが暮しのかなめで、ギー兄さんの教会にもあまり顔を出

されなかった。ただ私には総領事とよく話をする機会があったのである。

総領事は、東京へ電話をかけるために事務所に顔を出される時、私が机に載せている本を取り上げては、黙ってもとに戻すということをされていた。そのうち当の本とからめて、私と話をしてゆかれることになった。私が総領事から受けた教育というのは、直接そのことに始まったのだ。私はさきのギー兄さんの蔵書からイェーツ関係のものを借り出して細々と独学していたのだから、総領事の話も自然イェーツをめぐっていた。

あわせてそれに先だつ思い出があって、そこでもイェーツと総領事が結びつけられている。それはK伯父さんと弓子さんの話し合いのなかでのことだ。総領事が「屋敷」へ戻って来られることになる二年前の、様ざまな出来事の重なった、お祖母ちゃんのお葬式の際のこととして……

その場には、総領事はいられなかった。弓子さんは、総領事の肉体的、精神的な過労のもっとも苛酷だった日々のことを、K伯父さんに話していられたのだった。余波はなお続いているし、ベルギーの新しい任地では、まだ日本の政治家、官僚とパイプの開けていないヨーロッパ共同体の幹部たちと、どういう人間関係を打ち建てるかが大きい仕事で、そのためにもう総領事は新しいテンションにとりつかれているようだ、と……

――Nさんが戦後最長不倒記録ということでさらに元気になられて、首相を続けられるようなことになってたら、あの方に見こまれてしまった総領事は（実際には、はるか以前にそのN首相からサンフランシスコ総領事の次の任務に呼び戻されていたわけで、総領事という呼び名がどうして「屋敷」の関係者の間に固定していたか、という説明はあらためてしなければならない）大臣官房外務参事官のままで過労死したと思うわ。

――Nが総領事を気に入ったとすれば、どこか似たところがあるからじゃないの？　僕はまだNが「首相の国民投票」というようなことをいっていた頃に、週刊誌で対談したことがあるんだ。もちろん総領事の方がずっと鋭敏で繊細な人間だし、Nは怪物だけれどもさ。それでもかつ両者ともに、こういう感じは残ってたよ。イェーツの詩だけどさ。《かれに選ばれた仲間たちは思ったもの、学校時代に／あいつは有名な男になるにちがいない、／かれ自身そう考えて、規則正しく生きたものさ／二十代は切磋琢磨したものね》。

――二十代どころか、いま現在も切磋琢磨は続いてるわ。ブリュッセルに着任する際に、フランス語はお手のものだけど、オランダ方言の挨拶もするつもりで、文法書からやってるんだから。

K伯父さんは、弓子さんの打ち返すような答え方にちょっと留保されるふうだった。私も意気揚々たる総領事夫人に、あ、これでいいのかな、と感じたことを覚えている。それというのも、あの頃すでにいくらかはイェーツを読んでいた私は、K伯父さんが引用された次の行を頭に浮べるようであったから。さきのギー兄さんの翻訳で続けるなら、《だからどうした？　プラトンの幽霊は歌う。だからどうしたのさ？》

総領事がまだ「屋敷」で生活していられる間には、食事の世話や掃除に部屋へ出入りするので、総領事の本の読み方の個性も自然に目に入るようだった。それには、成城学園前の家で知っているK伯父さんの読み方と似たところと、すっかりちがっているところとがあって、印象にきざまれた。

似ているところというのは、総領事がK伯父さん同様辞書を丹念に引いて鉛筆で書き込み、赤線を引いたり枠で囲んだりされたこと。K伯父さんが高知の講演の帰りに寄られた時、その話を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すると、若者のように赤くなったK伯父さんは、――いや、総領事の語学力と僕とでは比較にならないよ、いつも使う辞書にしてからちがうだろう？　といわれた。確かに総領事は英和辞書を手許に置いていられなくて、いつもCODを使っていられた。植物の和名を知りたいおりなど、私の辞書にあたってみられるのだった。

K伯父さんと総領事の、さらにはっきりした読書法のちがいは、私の知る限り、K伯父さんが研究書でもイントロダクションから読みはじめ、途中とばしたり、最後まで読まないですましたりはされなかったのに対して、総領事は幾冊もの本を常に脇に積みあげて、獲物に狙いをつけるように必要なページを読むやり方であったこと。それについて、私が質問したというのでもなかったけれど、こちらもやはり顔を赤らめるようにして、弁解されたことがあった。

――Kちゃんはそれを職業に選んでいながらさ、文学を楽しんで読む人だけれどさ。私の読み方はちがうんだよ。こちらには永年のお役所勤めの悪癖があって、現在必要な問題点を確かめりゃいい、というんだから。該当部分を部下にコピイしてこさせさえしかねないものね。加えていまの私には、一冊まるごと丁寧に読む時間の余裕はないんだよ。自分の積み上げてきた人生に一杯食わされたという気分で、いまさらながら必死に方向修正してるんだからね。緊急に必要な部分を確かめる読み方なんだけれども、専門的な素養はないしさ……

総領事が、これもさきのギー兄さんの書庫から持ち出された「エヴリマンズ・ライブラリー」版のイェーツ全詩集の、開いたページに載せていられるカードの訳詩を読んだことがある。総領事の眼をかすめて盗み読みしたというのではなかった。総領事から、カードを読んで感想をのべるようにといわれたのだ。

――Kちゃんが自分の小説にイェーツを訳して引用してるのを見たことがあるんだがな、サッチャン。かれは『一九一九年』の第三セクションのね、三番目のスタンザもどこかに訳していたろうか？　"The swan has leaped into the desolate heaven:"以下の節。Kちゃんの小説を今朝から引っくり返して見てるんだけれども、なにぶん量が多いのでねえ……

それで私が試みに訳した当の部分をさ、きみに読んでもらって、それがKちゃんの訳詩のトーンを感じさせないかどうか、判定してもらいたいんだよ、サッチャン。私がどこかでKちゃんの訳詩を読んでいて、やんわりとでも影響を受けていたらシャクだからね……　だって、私はかれの五十分の一も書くことなしにこの世を去るんだぜ、そんなこと不公平じゃないか？

《荒涼たる天に跳び込んで行った白鳥。／その姿を思い浮べることでの荒廃、もたらされる憤怒。／すべてを終らせようとするほどの、／おれの労苦の一生が想像したところのすべてを、／なかば想像しえただけのもの、なかば書きえたのみのページをすらも。／おお、しかしおれたちが夢みたのは、矯(ためた)すことであった、／なんであれ人類を傷(いた)めるところのすべてを。／しかしいま、冬風吹きすさぶ時、／さとらねばならぬのか、夢見た時、おれたちの頭は狂っていたのだと。》

カードには総領事が黒インクをつけたGペンでスケッチされた、crack-patedという言葉にいかにもふさわしい頭の男が荒野にたたずんでおり、荒模様の空には小さな鳥の影も描かれていた。

この詩に総領事がそれだけ深い思い入れをされたのには、それを書いた際のイェーツが五十四歳だったことを年譜で調べ、自分の年齢にひきくらべてということがあったはず。

総領事のイェーツの読み方は、露骨なほど伝記主義だったのだ。詩集そのものを人並はずれた語学力で丹念に読み通し・読み返すということをされているのも確かだったけれど、さらに目立

つのは書庫にあったものから新しい出版まで、次つぎに評伝を読んでゆかれることだった。そしてイェーツの生涯と同時代の出来事に結んで解読された詩を、あらためて詩集に戻って書き込みを更新しながら読みなおし、総領事自身の言葉を使えば、初めて了解するというのが、繰り返されたルーティンだった。

私はそれを不思議に感じていたものだが、そのうち、しだいに切実に納得するようになったと思う。総領事は、自分の生とそれを越えたものを――残り時間が許すかぎり、としばしばいわれたものだ――初めて了解する必要に追いたてられて、イェーツを読んでいられたのだ。毎日、午後の郵便で届く「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」紙を詳しく読んでもいられたが、それ以外はずっとイェーツ関係書を読むのが日課だった。新しい病気に罹った人間が、病気自体や適当な病院の選び方について読みあさる感じで。総領事がイェーツを引用して話される時、私にはそれが詩人の原典から来ているのか、評伝を構成している他の文献からのものなのか、わからぬことも多かった。

この頃、東京の新聞社の出している硬派の週刊誌に、例の花田記者が連載のコラムを始めていた。ギー兄さんの農場と宗教活動への攻撃から転じて、以前にもあったらしいK伯父さんについての人格攻撃を連ねている。それを読んでのことだったが、総領事はこういわれた。

――この手の新聞記者はね、義務感旺盛だけれどもコラムの才能豊かというのとはまた別なんだ。そこでたいてい何年かをひとつページにまとめた式の日記をつけてるんだね。次のコラムの種子に窮すると、去年か一昨年の項目を見て、以前書いたコラムを思い出す。そこで続きを書くのね。これからKちゃんは一生やられ続けだね、この記者が重役にでもならないかぎり。こうい

うことだ、"The more alive one is, the more one is attacked."

アフリカの野生動物を撮った記録フィルムにね、最近じゃ、ヴィデオか？　年老いたバッファローなりなんなりがさ、みすぼらしく痩せて禿げちょろけて、生きながら死んでいる具合になってからも、ジャッカルかハイエナに攻撃され続けるシーンがあるじゃないか？《生き続ければ生き続けるほど、人間はさらにも攻撃に身をさらす》、これは真実だね。

私が、それはイェーツからの引用ですか、イェーツについての引用ですか？　攻撃されて憤怒している老人、ということで探せば出て来そうですが、と質ねると、総領事の答えは次のようだった。

――ドロシー・ウェルズリーという友達への、イェーツの手紙。この人は年下の女流詩人のはずだよ。手紙全体じゃなく、その部分が引用されてるのを読んだだけだけれど。さきのギー兄さんのイェーツ関係の蔵書にね、もちろん書簡集も数種あるけれど、この手紙は見あたらないんだ。書誌を見ると、ウェルズリーという人あての手紙だけ集めた本があるようなのでね、Kちゃんに、神田の洋書店で探してみてくれと頼んではいるけれど。

……もっとも基本文献を集める態勢をとってみてもさ、一冊ずつしっかり読む時間があるだろうか？　私は外務省にかかずらわって、人生の時をむだに費したねえ！　こういう年寄りくさい腹の立て方が、そもそもイェーツ式だとも思うんだがな！

総領事が、年寄りくさい腹の立て方という言い方に始まり、老年の、老人のという種類の言葉を使われることは多かった。それもイェーツを介して総領事が老年の感性と思想ということを強調されるのを聞いて、私が後からイェーツの詩集と年譜に対照してみると、たいていイェーツの

五十代初めの仕事と繋がっており、つまりは総領事のあの時期の年齢とかさなっていたものだ。

もっとも、ともに五十代前半のイェーツも総領事も、老人という言葉にはまったくそぐわぬ若わかしさであるように感じられたのである。とくに総領事は、大腸にできた悪性でないポリープの手術を経て、ということであったけれど、お祖母ちゃんの葬儀の際の顔色の悪さを思うと、むしろいまはすっきり痩せて精気のあらわな印象すらあった。そこで「屋敷」の者らはみな、総領事の引退を、手術と直接結ぶ肉体的な不安から来たものではなく、それを契機に、精神的な転機が訪れてということだろうと受けとめていた。弓子さんとの別居も、総領事の回心への進み行きが彼女には不本意でということではないかと、アサさんがいわれるのを聞いたように思う。それは総領事の、必ずしも教会に熱心ではないが、それを決して無視されない態度と、あわせて、納得できるもののようでもあった。

ところが総領事自身は、私に次のようなことを話されたことがあったのだ。

――私の退職を外務省がスンナリ受け入れてくれたことにね、うぬぼれかも知れないが、意外な気持もあったんだよ。もしかしたら、私の知らぬ情報が病院首脳と霞ヶ関を行きかって、もちろん弓子を媒介にしてさ、そういうことだったのじゃないかとも思うんだ。私が外務省を退いたことで彼女は幻滅したし、将来の生活設計もあるしというわけで、自活する道を探っているわけだけれど、役者だからね、あの人は……

ともかくも、いまのところ私は彼女の主宰する芝居につきあうほかなくてさ。しかしイェーツを読むにあたっては、本音のところでそうしたいからね。もうあとわずかの年月しか残っていない者としての、イェーツを読む基本方針はたててるわけだ。サッチャンもイェーツについて私が

話す時には、そのつもりで相手になってもらいたい。Kちゃんにもそういってあるんだよ。

もっと過激なことを、総領事がいわれたこともある。それは外務省の同期の人がマレーシアから一時帰国されて、松山の胡支配人のホテルで会食されて来ての、幾らか酔っていられた日のことだったけれど……

――あと二、三年のうちにね、サッチャン、私は実際ひどいことになりかねないのじゃないだろうか？　それを思えば、上等な酒の一杯機嫌で、よく整備されたヨーロッパ車を走らせてね、他人に迷惑はかけぬ事故死をとげるというような夢想に誘われたりもするよ。しかし、それだけスマートにやる権利が自分にあるだろうか？　まだこの国が貧しかった時以来、その予算を使って人生の大半を暮してきた身がさ！

こういう思いにたって、総領事はイェーツの研究書を読まれてもいたのだと思う。もっぱら文学の理論を介してイェーツの詩を分析するタイプの本は、すぐさま見限って、さきのギー兄さんの書庫に逆戻りさせられた。そのようにして、とくに評伝の性格が色濃いものを対象に読まれるのだが、総領事が赤鉛筆を引いて精読され、それを話題にもされるのは、おおよそイェーツの五十代以後の経験と、それに根ざした詩についてだった。

こうした総領事の、まっすぐ自分の実生活に結んだ、妙にリアルすぎる読みとりに、私は正直なところ切羽つまった浅ましさを感じないでもなかったのである。しかし総領事は、イェーツについて研究論文を書くことを意図していられるのではなかったし、教壇に立とうとしていられるのでもなかった――松山の大学から「国際関係論」の講座を打診されていたし、ハーヴァード大学から研究所の客員として招請状が来ていたことも、総領事の友人からの交渉が事務所のファッ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com